

## 73. 中国で見聞きしたことなど

### 1

今夏、一昨年に続き2度目の中国文物見聞の旅を果すことができた。この2回の訪中は、関西を中心とする地域で主に埋蔵文化財の保護行政にたずさわっている有志が関西文物保護青年職員友好訪中国（団長一奈良国立文化財研究所町田章）として訪れたものであり古来からわが国にさまざまな影響を与え続けてきた中国の文化財に直接接して中国文明を少しでも理解し、それによって日頃取り扱っているわが国の文化財を新しい観点から見直そうというほどおこがましいものではないが、とにかく知りたいという一心からであった。この2回で訪れることのできた地は瀋陽、旅大、北京、安陽、西安(長安)、洛陽、蘇州、上海、広州などである。これらは中国のごく一部の地域ではあるが、それ

でも中国大陸各地の状況を目の当りに見てまずその広大さに目を見はった。そして、各地の文物を見ることによって、その高度で奥行きが深く多様性のある文化の一端をかいまみた気がした。見学できた個々の文物についての感想は別の機会にゆずるとして、ここではその中から特に近江と何らかの関係を有するものを1・2とりあげてみたい。

### 2

サソリ文瓦と通称される蓮華文方形軒瓦と川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦で瓦当裏面に丸瓦部の布目と連続する布目のある瓦は大津宮時代に使用されたと考えられるもので、大津北郊地域特有の瓦である。これらは今までに榎木原瓦窯や穴太瓦窯で焼かれたことが知られている(註1)。この特異な形状の方形系統の瓦はわが国の長い瓦の変遷の中でこの時期にこの地域に限って出土するものである。このため、この意匠の発案には天智天皇の強い唐への志向性と関係がありはしない



かという着想がある。また、瓦当裏面に布目のある複弁蓮華文の意匠は大和川原寺出土のそれと類似し、これらはほぼ同時に現れる文様で、これも唐の影響が考えられている。こうしたことから、いわゆるサソリ文瓦と瓦当裏面に布目のみられる瓦について特に注意を払いながら各地の博物館を見て回った。

しかし、瓦当が方形で丸瓦部も断面が方形を呈するサソリ文瓦はもちろん、それに類似する瓦はついに見出すことはできなかった。北京の歴史博物館では学芸員の斎吉祥氏に持参した写真を見せて類似する瓦はないかとたずねもしたが、そういう種類の瓦は中国にはないという答えであった。サソリ文瓦の源流は中国にはないようである。過日、韓国へ行った際もこのことに注意したが認められず、関係図書にもみられないため、この種の瓦はやはり大津宮時代の南滋賀を中心とする地域にのみみられる瓦として位置づけられようか。

ただ、軒丸瓦で瓦当裏面に布目痕のみられる瓦についてはやや手がかりをつかむことができた。各博物館の展示はいずれも瓦当表面を表にしているため裏面の観察はほとんどできなかったが、西安にある陝西省博物館で秦代(B.C.221~B.C.206年)の円瓦当(日本でいう軒丸瓦)の瓦当裏面下半の円周にそって凸帯があるのを薄暗い展示ケースの斜め下からかろうじて確認することができた。この凸帯は南滋賀廃寺や檜木原瓦窯出土の瓦当裏面に布目のみられる瓦に特有のもので、瓦当と丸瓦部を接合する際、この種の瓦は瓦当に円筒形の丸瓦を押しつけ、接合後円筒を縦に半截してその半分を切り取るのであるが、その時瓦当裏面の下半周縁にそって切り残した堤状の凸帯ができる(註2)。西安で見た瓦はまさにこれと酷似する凸帯だったのである。また、北京の中国社会科学院考古研究所の展示ケースでも漢長安城出土瓦に瓦当裏面の下半に同様の



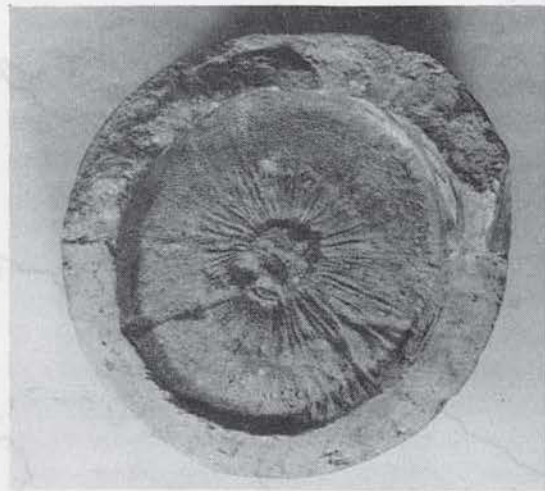
蓮華文方形軒瓦(サソリ文瓦)

凸帯を認めることができた。これも暗くて布目痕の有無についてはまでは確認できなかったが、考古研究所の安志敏先生に布目の有無やその製作方法について質問してみたところ、先生は布目の有無についての細かな点までは記憶されてはいなかったが、その製作については、円筒形の丸瓦を瓦当に押しつけた後、半分切りはなしたようだと言われた。この技法は南滋賀廃寺や檜木原瓦窯出土のものと同じ技法といえるのである。

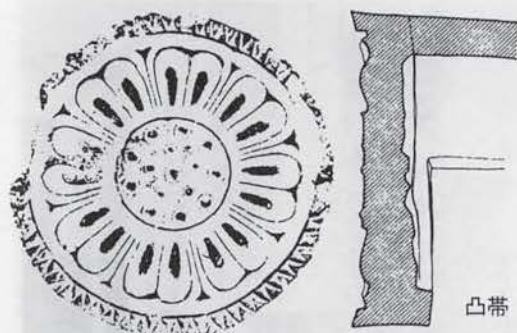
中国における瓦の起源は戦国時代(B.C.403~B.C.221年)にあるといわれ、最初、瓦当が半円状を呈する半瓦当が現れ、その後円瓦当も現れた。また、円瓦当を半截して半瓦当を作ることも行われたようである。円形の瓦当に円筒形の丸瓦を押しつけ、全体を縦断に二分して半瓦当を2個作るか、または筒部のみ半截して円瓦当1個を作る技法はすでに漢代には存在し



複弁蓮華文軒丸瓦(南滋賀廃寺出土)



同 裏面



凸帯

いわゆる一本造り軒丸瓦(南滋賀廃寺出土)

ていたといわれる。陝西省博物館で見たのはそれより古い秦代のもので、この後者の技法は南滋賀で出土する瓦に共通するのである。このいわゆる一本造り技法はわが国では南滋賀のそれが初現である。近江ではその後、奈良末ないし平安初期に瀬田を中心とする地域に流雲文の文様をもつ瓦当に用いられ、平安前期後半～中期には平安京所用瓦にみることができる。中国でのこの種の瓦の位置づけとその後の経緯は明らかでない。その後瓦作りは朝鮮に伝わり、さらにわが国にもたらされるのだが、わが国で最初に作られた飛鳥寺の瓦はこうした製作技法は用いていない。中国における時期とわが国とでは約600年の空隙が有ってその経緯についてはまだ明らかでない。朝鮮半島でこの技法を用いた瓦については管見ではその例を知らないが、過日、慶州を訪れた際、骨董品店の店先で李朝時代の瓦ではあるが瓦当裏面に布目痕の認められる瓦を確認することができた。今後こうした観点からみてゆけば時代のさかのぼるこの種の瓦の見出される可能性があるように思われた。こうみると、わが国でみられるいわゆる一本造り技法もその源流は朝鮮・中国に求められるようだが、その具体的な実証については今後の課題としたい。

3

天智天皇を奉祀する近江神宮には漏刻(水時計)が推定復原されている。これは『日本書紀』天智10年の条に

夏四月の丁卯の朔辛卯に、漏刻を新しき臺に置く。始めて候時を打つ。鐘鼓を動かす。始めて漏刻を用いる。此の漏刻は、天皇の、皇太子に為す時に、始めて親ら製造れる所なりと、云云(註3)。

とあるところから、新しい技術や新進の文明を強く求める気質のあった天智天皇にちなんで置かれたものであろう。

わが国における時刻制度についての初見は齊明天皇6年(660)で、天智天皇の皇太子の時に漏刻(刻)を製作したと伝える。しかし、その構造や当時の時法の詳

細については明らかでない。

時計には水時計(漏刻)や砂時計、ローソク時計などの原始時計、振り時計、テンペセンマイ時計、水晶時計、原子時計などがある。水時計や砂時計などは容器に入れた水や砂が小穴から流出するのにはほぼ一定の時間が必要であることを利用して時間を測ろうとするものである。14世紀になるとおもりを動力源とする機械時計が用いられるようになり、17世紀中頃にテンペセンマイで制御されたテンペを共振要素として使ったものが近年まで多く普及していた。最近では周期性のきわめて高い水晶片を共振要素として用いた腕時計や原子振動に基づいた原子時計も作られている(註4)。

わが国において、水時計は唐から学んだもののようで『大唐六典』という書物には「壺ニ孔シテ漏(水時計)ト為シ、箭ヲ浮ベテ刻ト為シ、以テ中星・昏明ノ候ヲ考エル」と記されており、壺に水を満し、壺に穿たれた小孔から水が下の受け壺に流れ、そこに立てた目盛を入れた箭が水量の増すに従って浮上して時刻を測る仕組みとなっていたようである。

古代にあっては、現在われわれの用いている定時法とは異なり、日出と日没または夜明けと日暮れなどを一組の自然時点として用いた不定時法であった。このため、季節によって昼と夜の長さが異なり、『大唐六典』には、24節気(立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒)ごとに箭をとりかえ、箭は昼間用と夜間用とあったため合計48本の箭が必要であったとされている(註5)。

平安初期に作られた『令義解』によると、中務省の所管で天文、暦数、風雲の気色などをつかさどる陰陽寮があり、ここには陰陽師6人、陰陽博士1人、暦博



近江神宮の漏刻



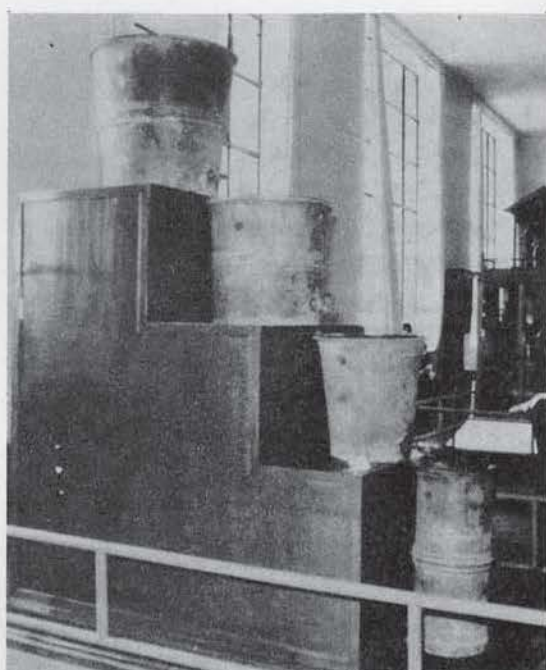
北京の故宮内交泰殿にある銅壺滴漏

士1人、天文博士1人、漏刻博士2人などがいて、その下にそれぞれ陰陽生や曆生、天文生、守辰丁などがいた。漏刻博士の下には守辰丁20人がいて漏刻博士から漏刻の節を伺い時をもって鐘鼓を打つことをつかさどっていたことが記されている。これによって、わが国古代律令制下における時刻制度の一端を伺うことができる。

さて、この近江神宮にある漏刻が何に基ついて復原されたものであるか不明であるが、これに類似したものを北京で見ることができた。

1つは故宮の乾清宮内の交泰殿に置かれていた。乾清宮とは皇帝の公舎ともいべき所で、わが国の宮殿でいえば内裏に相当する。この正殿に当るのが乾清宮でその後ろに交泰殿がある。交泰殿の中央には宝座が置かれ、その左右には2個の大きな時計が置かれている。向かって右側が水時計で、左側がゼンマイ式の大時計である。この水時計は「銅壺滴漏」と説明があり、逆台形の四角い壺が階段状に3個並べてあった。これは乾隆10年(1745)に古式にのっとって作られたものという。置かれた場所が薄暗く、しかもかなり高い位置にあったため具体的な構造についての観察はできなかったが、近江神宮の漏刻と形状がよく似ていた。

もう1つは歴史博物館に展示されていた。これは元



北京の歴史博物館にある銅壺滴漏

代の延祐3年(1316)のもので、現在中国に現存するものとしては最も古く、最も整った銅壺滴漏であるという。これは銅製で横断面の丸い壺4個から成り、それぞれ日壺、月壺、星壺、授水壺と呼ばれ、階段状に4層に並べて置かれている。それぞれの壺には蓋があって一定の水が上から下へ流れ落ちるようにしてある。一番下の受水壺の蓋の中央には1本の銅尺がとりつけてあり、この尺には12の刻みをつけ子から亥までの十二支名を下から上へ順に付している。銅尺の前には木製の浮箭が銅尺にそって上下する仕組みになっている。そして箭の下端は浮舟となっているために水の上昇に従って箭も浮上し、この箭の上昇を銅尺で測って時刻を知る構造になっている。

こうした事例をみて、天智天皇によって製作された漏刻もこれらと類似したものと察せられるのである。

註1 林博通・葛野泰樹ほか『榎木原遺跡発掘調査報告—南滋賀廃寺瓦窯—』(滋賀県教育委員会 昭和50年)

林博通・葛野泰樹「滋賀県穴太遺跡の瓦窯跡」(『考古学雑誌』第64巻第1号 昭和53年)

註2 林博通「いわゆる一本造りあぶみ瓦について」(『史想』第17号 昭和50年)

註3 坂本太郎ほか『日本古典文学大系 日本書紀下』(岩波書店 昭和47年)

註4・5 広瀬秀雄『曆』(近藤出版社 昭和53年)  
(林 博通)